

## 研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-142	C-141	20-404	独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター 佐久間寛之 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター 松下幸生
<b>題名 (原題/訳)</b>			
Vulnerability for Alcohol Use Disorder is Associated with Rate of Alcohol Consumption アルコール依存症の脆弱性とアルコール消費量との関連			
<b>執筆者</b>			
Gowin JL, Sloan ME, Stangl BL, Vatsalya V, Ramchandani VA.			
<b>掲載誌</b>			
Am J Psychiatry. 2017 Nov 1;174(11):1094-1101. doi: 10.1176/appi.ajp.2017.16101180. Epub 2017 Aug 4.			
<b>キーワード</b>			<b>PMID</b>
アルコール乱用、大量飲酒、アルコール依存症家族歴、強迫性、性差			28774194
<b>要旨</b>			
<p><b>目的:</b> アルコール使用障害のリスクファクターはそのいくつかに分かっているものの、リスクがあっても多くは発症しない。脆弱性を持つ群と健常群との表現型の違いを同定することは、より高いリスクが何かを同定するのに役立つ。血中濃度 80mg%以上と定義される大量飲酒は法的にも健康上でも悪影響をもたらし、アルコール使用障害の初期マーカーとなり得る。われわれは厳格な研究設定を行い、アルコール依存症の家族歴を持つものを含むアルコール使用障害者、男性、強迫性、アルコールに対する低レベル反応は、アルコール消費試験において大量飲酒を予測するという仮説を立てた。</p> <p><b>方法:</b> 本研究は一般的な飲酒者 159 名を対象とした横断研究である。静脈内アルコール自己管理投与セッションを完了したものを調査対象とした。コックス比例ハザードモデルを用いて、アルコール使用障害のリスクファクターは大量飲酒レベルのアルコール自己投与量と関連するかどうかを調べた。</p> <p><b>結果:</b> アルコール依存症の家族歴 (ハザード比 1.04, 95%信頼区間 1.02- 1.07)、性別が男性 (ハザード比 1.74, 95%信頼区間 1.03- 2.93)、高い強迫傾向 (ハザード比 1.17, 95%信頼区間 1.00- 1.37) が試験中のアルコール大量摂取率と相関した。</p> <p>上記 3つのリスクファクターすべてを持つ群は低リスク群と比べ、最も高いアルコール大量摂取率を示した (ハザード比 5.27, 95%信頼区間 1.81- 15.30)。</p> <p><b>結論:</b> 大量飲酒はアルコール使用障害の早期予測因子である可能性が示唆された。臨床評価の一部として、入念に評価されるべきである。</p>			